

氏名(本籍) 齋藤友介(埼玉県)
 学位の種類 博士(教育学)
 学位記番号 博甲第1,451号
 学位授与年月日 平成8年3月25日
 学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当
 審査研究科 心身障害学研究科
 学位論文題目 聴覚障害児の読話に関する研究
 ー音節可視度に基づいた実験的検討ー

主査 筑波大学教授 教育学博士 草薙進郎
 副査 筑波大学教授 中野善達
 副査 筑波大学教授 教育学博士 吉野公喜
 副査 筑波大学助教授 茂呂雄二

論文の要旨

1. 問題の所在

聴覚からの音声情報の取り入れが著しく制限される重度聴覚障害児(者)において、話者の口唇ならびに舌、顎の動きから発話内容を理解する「読話」は、健聴者とのコミュニケーションを行う上で不可欠な言語受容手段となっている。聴覚障害児(者)の読話遂行に影響を与える要因のひとつに、読話材料の可視性(見やすさ)の要因があるが、先行研究では、主に口形(もしくは口型)の問題に焦点が当てられており、材料を構成する音節の見やすさに注目して、読話材料の可視性の影響を検討した研究は見あたらない。

2. 研究目的

上記のような背景をふまえ、本研究においては読話材料の可視性の指標として単音節同定課題により得られた音節可視度を採用し、無意味連続音節、単語、短文・句といった諸種の読話材料において、音節可視度が読話成績におよぼす影響について検討することを目的とする。

3. 研究の構成

本研究は、以下の4実験から構成されている。

実験Ⅰ：『単音節同定課題による音節可視度に関する検討』

実験Ⅱ：『無意味連続音節の読話における音節可視度の影響に関する検討』

実験Ⅲ：『単語の読話における音節可視度の影響に関する検討』

実験Ⅳ：『短文・句の読話における音節可視度の影響に関する検討』

4. 研究方法

1) 研究対象

実験Ⅰの対象児は附属聾学校小学部(4～6学年)ならびに中学部に在籍する重度聴覚障害児95人である。実験Ⅱ、Ⅲ、Ⅳの対象児は同校小学部(4～6学年)に在籍する重度聴覚障害児40人である。本研究においては、読話材料の可視性に関する検討を主眼としたために、対象の選定にあたっては①失聴時期が概ね生後2歳

まで、②現在の良聴側裸耳の平均聴力レベルが90dB以上、③読書力診断検査の偏差値が40以上、という3条件を満たす児童・生徒を被験児とした。

2) 読話材料

実験Ⅰにおいては標準日本語100音節を読話材料とした。実験Ⅱにおいては実験Ⅰより得られた音節可視度に基づき、①高可視度（直音62音節のうち上位25パーセントに含まれる音節）と②低可視度（直音62音節のうち下位25パーセントに含まれる音節）の2条件に分類された無意味連続音節材料（50材料）を読話材料とした。実験Ⅲにおいては音節可視度（①高い、②低い）と語彙難易度（①易しい、②難しい）を統制した4条件に分類された3音節単語（40材料）を使用した。実験Ⅳでは実験Ⅲで使用された単語をターゲット語として各1語ずつ含む短文・句（20材料）を読話材料に使用した。なお、本研究で使用された読話材料の話者は日頃から聴覚障害児（者）と接する機会をもつ、関東方言を有する女性手話通訳者（1名）ならびに言語療法士（1名）である。

3) 実験手続き

VTRに収録された読話材料は、聾学校の視聴覚教室にて27インチカラー・モニタを用いて呈示し、対象児の読話反応をかな文字で回答用紙に記入させた。

5. 結果

1) 実験Ⅰ

可視性の指標となる標準日本語100音節の音節可視度に関する資料を入手し、あわせて音節可視度におよぼす調音音声学の素性（調音点、調音様式、後続母音、有声／無声音、口蓋化／非口蓋化音）の影響について検討をおこなった。

①日本語100音節の音節可視度は一様ではなく、最低0%から最大92.6%におよんでおり100音節の平均音節可視度は23.5%であった。

②一元配置分散分析による検討の結果、調音点、後続母音、有声／無声音、口蓋化／非口蓋化音の各素性が音節可視度に影響を与えていることを確認した。

2) 実験Ⅱ

読話者の語彙知識や文脈の影響を受けない無意味連続音節の読話における音節可視度の影響を検討した。

一元配置分散分析による検討の結果、2音節材料（30材料）と3音節材料（20材料）の両条件において高可視度音節から構成される材料の読話成績が、低可視度音節から構成される材料の成績を上回ることが示され、音節可視度の要因が無意味連続音節材料の音節同定に影響を与えていることが確認された。

3) 実験Ⅲ

語彙知識が影響をおよぼす単語材料における音節可視度の影響を明らかにする目的で、音節可視度ならびに語彙難易度が異なる単語材料における単語の読話成績ならびに音節の同定成績に関する検討を行った。

二元配置分散分析による検討の結果、①単語の読話ならびに音節同定に与える音節可視度の影響が確認され、あわせて、②語彙難易度の要因の影響も確認された。

4) 実験Ⅳ

語彙知識ならびに文脈が影響をおよぼす短文・句の読話における音節可視度の影響を明らかにする目的で、音

音節可視度と語彙難易度が異なる単語を含む短文・句材料における、短文・句とターゲット語の読話成績、および音節の同定成績に関する検討をおこなった。

二元配置分散分析により、①短文・句と②ターゲット語の読話、ならびに③音節の同定に与える音節可視度の影響が確認された。あわせて、④ターゲット語の語彙難易度の影響が確認された。

6. まとめ

1) 日本語読話材料において、音節可視度が無意味材料のみならず、単語や短文・句といった有意味材料の読話においても影響を与えることが、初めて明らかにされた。また、その影響は材料を構成する単語の語彙難易度と一定の関連性を有することを確認した。

2) 音節可視度が無意味連続音節から短文・句にいたる、諸種の言語材料における可視性の指標として利用可能であることが示唆された。

審 査 の 要 旨

本論文は聴覚障害児の読話について、音節可視度に基づいて実験的に解明したものである。従来、聴覚障害児の読話を日本語言語素材の面から研究したものはいくつかあるが、本研究のように、音節可視度を基礎にして、言語素材を作成し、体系的に読話のメカニズムを解明したものはなく、独自の研究として高く評価できる。音節可視度及び、無意味連続音節、単語、短文・句レベルで得られた知見は、読話能力の評価法、読話訓練プログラムの開発等に貴重な貢献ができるものと期待される。言語材料の選定と活用に関する若干の問題点は指摘されるが、今後、誤答を分析するとともに、言語素材を量的、質的に拡充ならびに検討し、研究の客観性をさらに高めることが望まれる。

よって、著者は博士（教育学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。